

小開
說明

春雨文庫

二編
上



A416
3

松村春輔編輯

開明

小説

春雨文庫二編

櫻雨園社中蔵版



春雨文庫二編之自序

雲ゆき雨旋してそ易の乾の詞たるまきらるる
 そほつ窓の中瓶よわしたる白梅の香あり
 志のばるる古風如大禹の代も其金比雨
 梁武帝の時代も一玉の雨き之津ぬらう
 舟を流し雨を年代記も見え西粟の雨
 歴史も裁きたるを愛や十日の雨出た水を
 破らぬ鯨の魚も雨を集り雨虎を雨葉

48-7521

一々出づ。高羊の雨も先たつて舞ひ。
 石燕石を破つて飛ぶ。たんと之を減る
 の凄然と。おのひ出でる。雨宮。溜水。ま
 ま。旅人の願ふを野路の。俄雨。五七。多
 の。笑ひも。雨あつて。ある地。ま。れ。か。や。れ
 来歴古事。人。喜。む。文庫の。奥。の。あ。ら。び。
 還。る。川。留。れ。岸。の。澄。を。矢。水。桶。り。も。
 餘りの。水。の。不。破。の。冪。屋。の。板。を。ま。り。

大方を漏し。い。ま。は。と。細。雨。書。屋。の
 雨。り。拍。子。漸。く。序。文。の。代。り。も。た。ん。

于時明治十年二月上旬
 細雨亭の窓下日記

松村春輔





清兵衛
妻阿岩



幕府の
権を恐
れど一
丈夫

歴史

俵屋
清兵衛



清衣のぬきし〜
あはれ程の如く

軍のし〜
あはれ程の如く

ま〜
あはれ程の如く

〜
あはれ程の如く



春雨文庫第二輯卷之上

東京

松村春輔著述

大久保春驪校訂

第四回

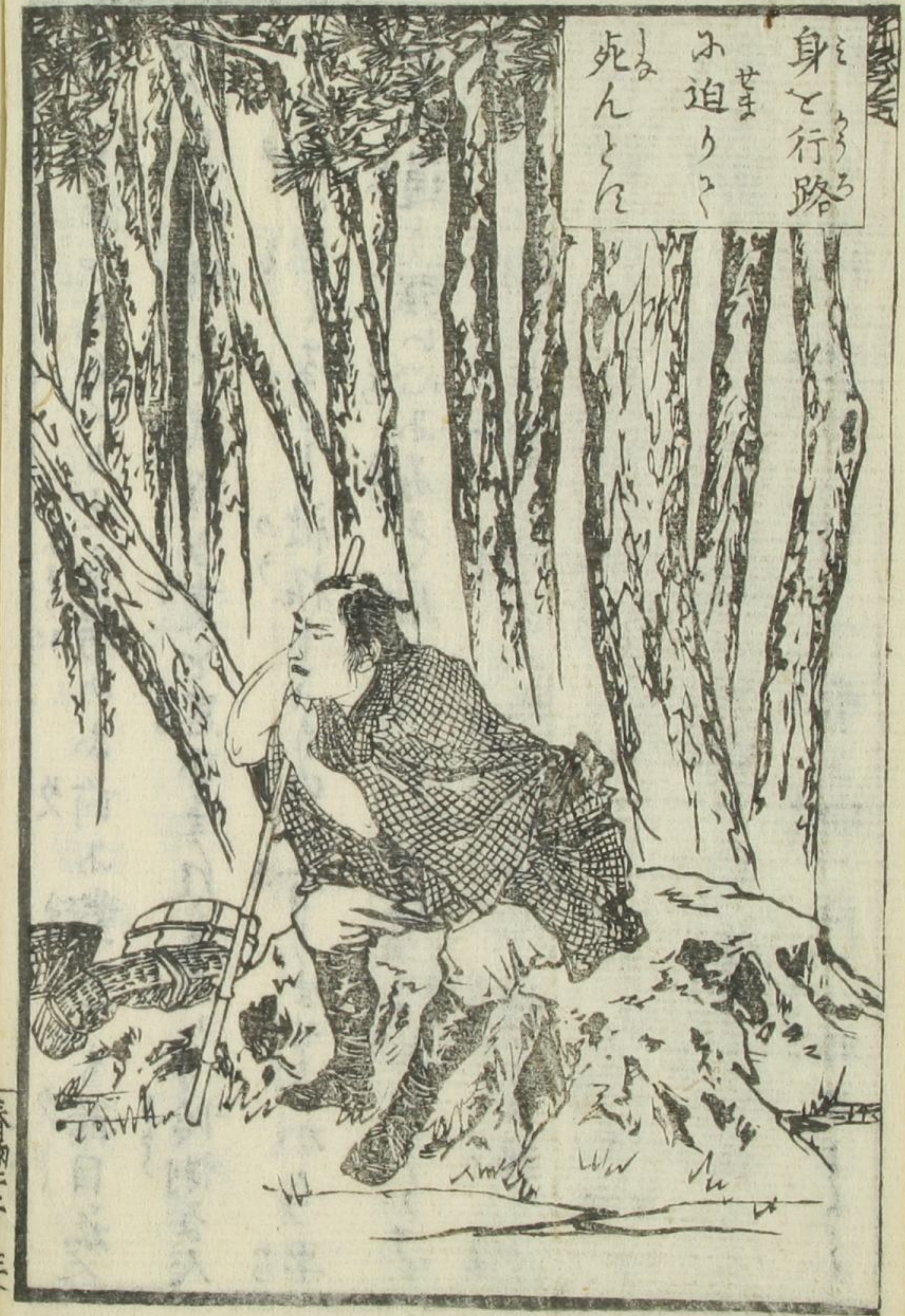
まろろえの木こまれまるまふま見まゆるま神かみ植うやま風かぜをを育そとの
ああるあどあなるあらんあとあ頓とん阿あがあ詠よれよ言ことのこと葉はのは志しと
りり我われ聞きんん子こ規き听きふふ北きた野ののの御おん神かみをを灵たま驗げん今いまもも著あ明ちやう
ああるあとあをを高たか法ほふ繁はげげずずうう金かねままううけけ何なに卒そつ配はいせせてて下くださいさいと

を理る願ひを懸まくも恐こき灵前参詣の人の絶
間も夏過ぎて秋と一言が淋しさの増しく一ト群立
騒ぐ雲ふむらつく雨脚の早きハ時の日和とせ暗り
て出ー夕月もまぶ三日四日の細眉木の間小ぐらき森
の蔭身形やつれ一人の男が詠ハ白齒の娘と連れ往
るやとらる其振も衰れ杖を力あ何びきの山路るら
ぬも息を切らじ吉さん再降て来さうど松工雲を
むらつへて居るが最降りハ仕ぬ人何どり道が滑溜の

で自己ア実おがつりしと一ホニ肥つてお在どうら只ぐ
さん服が摩てお困りどのお此間うら無理る道と歩
行とのぞ踏出しと脚むがだんく悪いのどヨまア吾俯の
肩へまろりりと捕つてお出る男手前どって痘と捲らへ
疲つて居るぢやアおん女アまどけとども其様子痛
くハ無ヨト口でハ言くと敢果どらぬ足の運動と男を
察し急いとして往く當の宿人旅の空此処らで一服
やらうらさうト傍の松の切株の露と拂ひて腰と懸を

女も側そば腰こしとかけ男おとこの顔かほと覗のぞひて見るみるるくく「わいの
と彼かれ様さまして居ゐる間あひだ小こ膝ひざを揉もませう男ううるるア男宜よ手て前まへも
草くさ卧ひて居ゐらアトい言いひるぐう思おもはずホツと息四よ邊へと
見みまわりて「男ウお坊まを方も思いぬ難なん免ぎとかけ自己かれ
此こ様んも苦しと為なるらおろう借金かきんが有うとも生
小こ居ゐるのが場であつと便よりあつて来きと人ハ知れず路ち
用ようの金ハ悉皆せんある病やまひハ次し第だい小こ重おもい足元あしもと我わが身みる
がらも愛相あいその盡とまさら合あせホニ智ち惠ゑの移人うつし男おとこどと

思おもつとヤアあめんらと女房めうぼうのお前まへ小こ對たいしても面めん目め移うつ人
女メアレ何なん様さまして其根ねを更と思ひますはのう子こ怜れん悽せいな人
でも間の悪くあると彼根ねしとのので有りませうから平
常じょうの通り強い心小こある居ゐて下さいる後生ごせいどうサト
言いさんも潤む声音こゑ小こ堰せきあめぬ泪見みせト話わしと移うつ人
「男ア宜いとして今夜こんやの趣向おもむいどう仕ませう移人うつし「男自おの己のも
夫それと案トて居ゐるのサ無恥は今こん宵よの小野の宿しゆくと為る小
もとよ土地とちの容子ようすハ知らず賣うる物ハ一昨おととい日ひよりら



身と行路
せま
み迫り
よ
死ん
と
に

昨日昨日より今日今日より日日日日迫る身の難儀明日の
凌ぎの思案がはる程へ実の力と落させぬと今まで
隠して居とけまとも脚氣の層とが増して来て最
一足も歩行移りく目己ア覚悟と極てあまつくさんず
知らずの他人でも女の身あらし世話のあらくれ人を
有う手前の跡不残つ居て何とく工夫とつけてくま自
己の命の惜みの程へ手前の躰が案とられると言と半
も歩き取らず女の其処泣く色戀で逃とのちやア

三年以来はととと良人のお前が彼様とと事か
ら死で仕舞と程の後で誰と便りふへんくと生るがら
へて居らまませう故々を放れ知らぬ土地で草の肥
不成て果るも約束ととと諦めて居りますく何卒
一所ふ死しと口説れと男のいとと声と曇らせ眼
とととと常くと知つと一徹る其方の気性さうと
了るあらしととと留ても止るぬらりつその腐れ此処で
二人が女死で未来で何時までもと言つ顔と見逢せ

て思おもひむワなツとと声こゑ立たれば男おとこもよう下くだ忍しのび音ねふいとと
ちつああけききき黄く昏そみれ松まつの梢こゝろみみ啼な梟う千ち草くさふすととくく虫むしさ
へも共ともみみ衰あれと添とへへみみけり

茲こゝみ漂さまよ泊ふ二ふ人たりの素す性じやうと尋たづねぬるる男おとこハ備び前ぜんみ岡おか山さん
在ざい小せう田てん村むらの農のう夫ふうみて笹さ井わ吉きち三さん郎らうとようが者もの力ちから量りやう
衆しゆ人にんみすぐれ相あ撲まと取とり劍けん術じゆつと遣つらふとと好あむむ
田でん畑えの業わざみし却かへて疎そろろ又また女おんなハみみ増まととつつへる者もの
ふく三さん年ねん前まへみ隣りん村むらの某たれよううう嬰ありあ仲あ睦むつままくく

春前二五

暮くししけりららが歩あははるる不ふ仕し合あみ借か財ざい嵩かめめをを京きやうへ
出いて俱ともみ稼かせぎぎ質しち入いれの田でん畑えと請うけ戻かへさんさんと相あ談だん
しし世せ帯たいとままみみ小せう田てん村むらの家いへと賣う拂りひ差さ下くだ當あらら
る負お債ひめののかかととつつけけ聊いさ残まのこりり金かねと以もて路みち費ひとまましし
西さい京きやうの知し己ぢと便よりり都みやこの空そらへへああろろははしし上のりりたたりりが
折せ悪あく吉きち三さん郎らう脚あしをを踏ふ出いて間まどどる旅ありり貯たくわへへの
路みち銀ぎんを無なくくしし辛くるししで京きやうみみ着ちきき力ちからとたたのむ知し己ぢ
の家いへと尋たづねぬるる去き年ねんの秋あきころ何なに国くにへへうう立たちちののきき

我の往く先と知らずと言まふ又頼との綱き
れて途方を失ひ思はずも迷ひ北野の夕まぐれ借
あそ死んと覚悟の爲したまふ此一條の由るまき贅
言ふ似たりと雖も既ふ初編ふ解とところの島田佐
兵衛が木屋町の別荘君香のゆと命と終る
の濫觴るまの看官志をうく退屈と忍びて狂も
去の末と御覧あらんて紙筋の
吉三郎夫婦の者の身の寄るべどもなしくも覚悟

あまがら衰さの又今さうお添増して震ふ
元小腰かいさぐり心細帯引きおどき死ふ小野の森と
も知らず松の下枝へうちかけ引を翻る葉ず人
の雨二人が袖を濡まきり涙ふ呉て居りし吉三郎
いれと励まし人の来ぬおサア早くアイトお増も
身支度多し既ふ益死よとんえたる折しも彼救
助ト女の声「ハツと答ふる詞と共ふ木蔭を飛び出
る二人の侍吉三郎とお増を抱きとも「うらなず短む

の振まひを致すまひぞト動ろを祓をツツとをりり不愕く
兩人「何方さるる存トません」が何卒まの場をお見遣
「放して死なす下さいま」あせりて止らぬ二人が
傍へ社殿の方より徐々来る年のころ四十むりの
上謁めく被衣を外し志とやうふ「其方とちが窮迫の
ころ前の程より物うげで残らず聞て居ります」と死
うとぶふ若気の誤り仮令一時の袖をひいて人の門
辺に立ちうとも容易ふ命の捨られまひ今日おろりて

黄昏ふ此御社へ参詣せし其方たち二人を救助よ
との威徳天神のお指揮およりのあらん悪い様おの
為ぬちどふ気と安くして居ると宜いコレ衛士衆二人を
大造勞れと根子よく介抱して連れて来やト物柔らう
ふ解諭さると吉二郎とち増の二人の夢ふ夢見し心地
しつハツと斗りふ平伏たり
吉三希お増を助けし北野の社へ参詣の婦人の如
何ある者ぞ下回ふみらる自然しと解りぬぞ

然すなはち是これは是こゝにあり一いつ回かいの劇げき場ば小せう比ひ較かくバ発はつ端たんと唱なめらるる場ば所しよ不ふ
て喜き永えい五ご年ねん九く月げつの事ことあり次つぎ回かいの文ぶん久きう二に年ねん二に月げつ中ちゆう
旬じゆんの説せつ話わふりて前まへの條ぢゆうより十年じゆんねん後のちの事ことと云い玉たま
へか

第五回

洛中らくちゆうと少すこ離りまて閑かん静じやうと占しほれど諸しよ物ぶつふの事ことかぬ清きよ
水みづ寺でうの坂さかの下した黒くろ板ばん塀べい小せう家けとかこゝ門もんを這た入いれバ根ね
府ふ川かうの飛と石いし斜しゃふ敷しきはく糸いと黄わう楊やう山さん茶ちや花かの薊あざみこを剪き
春はる二に上じやう八はち

刀たうの多た際さいららきりりと石いし燈とう籠ろうふむす苔こけも當あ所しよ小せう言げん
き住すま居ゐとんん也やれど二に回かいの玄げん関かんありととぬぬく表あ紙し懸けん
名な札さの東とう湖こ風ふうの筆ひつ勢せいよく六ろく代だい經けい験げん整せい骨こつ處ちよ荒あ井い宗そう
意いと書しよ記き一いつ玄げん関かんの白しろ布ふをを手てと巻まき足あしを緘しんげ
たる人ひと々々多たく歩あつどど以も療りやう治ぢの番ばんの来きるる所しよひひどど待まち
草くさ卧をて已いが隨ずい意い百ひやく轉てんの口くちかかりりままくく未まどど何なにどどりりふ
寒さむいいでではは危あやいいまませせぬぬりり「い左さ根ねささ子し夫そ不ふ志してて一いつ昨けつ日にち
の初はつ午ごの伏ふく見みの蒼そう稻だう菟とへ大だいききうう人ひとがが出でううけけままと

料理屋などの大ぶん販りのとよ評をん世間ふい無
益る金田とそふとのが有りませうて子イヤまで由松
子らのやうふ年が年中がちくく居て鼻の先の觀
音さんへもろくお参りとせぬ振る者をうりでの盛
り場の人とちの活計が立ませんてアアイヤ觀音さ
んと言は別當の月照さんい宜いお方であらうッ志や
つとが負ふことかえらいお嫌ひぶとのとトやグアイ此程
逃亡と為るなまことこの借金の訳での有りませうい何

外国人が来てくろ襟裡さんと関東の代官との間
が混雜つき景気不どる錢まうけも有りません
因ふろの清水寺の住僧成就院月照の外国船渡
来のためふ日本の国體と失るなんと成憂ひ攘
夷鎖港の激徒と共ふ志ととげんと力を竭一同意
の者と密に我寺中ふかてせひ置きらるどせーが
此ふろ幕威なる盛んありて是らの黨と探索す
るごと厳酷るまじバ諸藩士と共ふ逃亡と難を

西國小遁るとりへども身を寄すべきの所多く憂
苦と慷慨ふや堪えざりけん終に薩州の海に身
を投じ国家と思ふの念力より果るべき際悟と遂
しとちまん

一月照さんら異人ぎりのから起つて脱走す遠ひあ
らの話江戸で正月の十五日に御光中の安藤の登
城する候待りけ坂下門の前で浪人が大勢取りま
き切と掛つとらふと是も元の起りを異人ごとの許

判異人うら江湖上小寐ことの多く成とふに困り切り
まに免角ことなるほどアア折らう奥の療治場で
下七番のお方ト呼ぶ声と吹つけハルくいや漸と吹
が参りまゝト此時表のうごよりして年齢三十四五
ふく衣服髪飾もきつとせー女が小腰と屈め入
り来り素肉と請ふ声ききつけ一誰と應へく立出
うちでー内弟子らしき惣髪男が今来一年増の顔を見て一
これに関取都石さんのお内方お堀さんサアくこち

ら人ごめん「まづびら浄免阿そむしき」ト女げんらん閑お居ひる人
 々へも會あ釈やるゝツ療治場へ通とるん得世の中さすげよの具あや
 員さとたのむ相撲取すまふとりの如才内儀ちよさのあひぎと知らしるもとり主人あやどの
 宗意さういを療治ちやうぢと為いるぐる「コレあの珍めづらしいおま言まさんんり
 宜よく来きるすつと冥取めいきりあひ此こあひと祇園ぎえんど一寸ちよつとあひ
 まゝまとご其後そのごかままつとるもどざざらんんナな「ハイごんなどる
 ぐる手前てまへ」かままけ大おほ無沙汰ぶさたと致いたすと宿やどでも
 宜よく申まうし訳わけのせせとのとと言いるぐる幅紗包あさぶくろとを取と



お増おぞう不計ふけい
 仇雙きゆうじゆう言いと認ま
 る

ひろげ「此品の例の驚知らず餘り少」でいさの針が
洗場のな容かゝる来しきとくうお目お掛ます一
盃やるあゆり物毎夜お乳のどくすと療治志
るがうお坊人扱扱お坊の少一膝とすわア今度宿
でい値前の岡山へ奥行よ下ります古々と言ひ必
と出さくう初めく来るのでいさのまね由る自分用や
何うとかけと餘計な間々とれますわが二夕月三月
へ帰らまますまひまどく些降けいりも刻をませ

ん夕例のお膏茶と十包とわど願つて裁けとや
一夫の目出とい様と閑取の話しおぼて居る久しかりでの
古々の錦まのメおいお為るそと有る僕お於ても
が勇む膏茶の今延して上るから少一待て居さうい
是ヨ次のお人を傍お居る弟子が大声とて「オ十八番の
お方トよびきて」應と答へり隔紙へとて「小座敷よ
り神を考まがら立出らん此ごろ京で人の名と知る目
明の文吉と言うりの幕府の光りと冠おきて虎の

威と借る狐毛の袷まき散眼顔ふあくるいんがら
先生お袷ふいとあり附移人かろ何卒叮嚀お療治と
おれと中しやす^宗い何処と痛めさしやつこのご^文私の
古い歩身でござんやす今年であかけ五年前島田様
かろの^い内意で近衛家の村岡と^い女と^いめ諸
藩の者と召捕るるとき橋本左門と^い奴と^い組で^い縁
庭へ落と^いぐと^い御影の飛石で脇腹と突や
と^い撲身ふ成と^いと^いえて暑^い寒^いサのかをりめふ^い免

角痛んで困りやす^い同^いず語りの手柄なる^いと側^いふ聞
み^いら^いお^い坊^いの^い丈^いと^い顔^いを見^いつ^いめ^いッ^い膝^いと^い寄^いせ^い手^いふ^い握^いり^いたる
煙管の羅字の推けて折^いる^いも^い知^いら^いぬ^い半^いり^い飛^いか^いら
ん^いづ^い勢^いひ^いあり^いしが^いホッ^いと^い一^い息^い忽^い地^いふ^い首^いと^いた^いま^いて^い思^い案^いの
^いお^い文^い吉^いの^いり^いろ^い肌^いぬ^いぎ^い「^い先生^いの^い処^いで^いご^いぜ^いん^いやす^い「^い只
今^い。^いサ^いお^い増^いさん^いお^い膏^い菜^いが^い出^い来^いま^いす^いと^い折^いく^いろ^い何^いれ^いの^い童^い
子^いみ^いや^い声^い張^いり^い上^いて^い小^い学^い讀^い本^い
「^い神^いの^い暗^いき^い所^いも^い明^いく^いみ^い見^いる^いと^いの^いゆ^い多^い人^いの^い知^いら^いざ^いら

所と思ひて假ふも悪きことと為せば忽ち罰と蒙る
あり人の知らざることと神を能知るも又不善
きことのふの幸ひと與え悪きことのふの禍ひと與
あるあり

遙るふ波ゆる東福寺の十二時の鐘ボオーン町内の夜番
グ火の廻りく太鼓の音ドンドンドンモ関取ちよりと
目と覺てお呉んるさいと言らるるアリモシ何様すまや
此様不眠らるるのさうらうぢれつとい今日朝ツから

お酒をくり飲でお服の些少も食らるゝのどヨヒと
解ふ當つて悩煩ひでも仕と目ふ何と思つとて及を
ちの事ヨウお起るさいと言へば移入ト肩のあさうを揺
振らると何をするのど七五月蠅おきる時分おやア
勝手お起る歩捨ておいら貰いて二一夫でも今日一
度も服とおとんで無かつサ一稲川ぢやア移入が服もく
食と移入服と眠のと当分の内絶久とトろのさく夢
り現ふく又グツと大軒お坊の味顔と覗きと目ガ

覚さみけきるやア夜よ着ぎてままくつて操く弄ろよよアア戯あ掛ける可止よト
いついつたたらら止よねねへへののろろ少ち時じ間かんももつつらら遣やふふとと小こ五ご
月げつ蠅えいとととと仕しやアアががるるららうう終は彼かれののトト言いひひかかけて他たのの家けへ
泊とるらシシどど外そとへへ出でるるとと客きやくのの機き嫌げんととりり家うちへへ帰かえるとと嬢ぢやう小こ五ご
ひひぐぐ責いららままちちやアア精せい氣きもも根ねもも盡つきててままののアア「オオヤヤ何い
時つ吾わ儂ちんががいいびびりりままししととエエ「左さ板ばんぬぬららすすののダダ責いどどアアと
言こと葉はふふ立たるる波なみ風かぜとと海うみ所しよふふるるググしてして最さいああをを顔かほとと和わら
げこ声こゑとと低ひららうう「少せうもも除よけけいい買せ取とのの心こゝろのの休やすむむららううふ

春兩三十五

仕しといいハハ吾わ儂ちんがが平へい常じやうのの願ねがひひどどううもも眠ねググつつてて在い在ざいのの無む理り
不ふ起おすすハハ怨うら襟めけけももどどもも壁く不ふ耳みあるる今いまのの世よの中ちゆう昼ひるハ
ああととりりとと憚おそりりてて落お々々話わのの出で来きぬぬとと云いふふハハ此こゝ間かん荒あ井い
先せん生せいさんさんのの家うちでで受うてて来きとと一いつ件けん彼かれととママアア何なんとと思おもつつててエエ
在いととエエとと身みをを摺すりりよよせせてて問とかかけけららまま此こゝ方かたハハ遮しや々々日ひ
ををここすすりり欠あかかるるぐぐらら面めん倒たうささううふふ「何なんとと云いふふららううとと自みづか
己おのれのの力ちからぢぢやアア田い作さくのの齒はぎぎりりでで送お付つけけ人ひとをを村むら岡おか
ささぬぬダダ捕とまますすとと成なるるののををああららずず冥みやう東とうへへ引ひきき下くだささ

れとうへ黄泉へ旅どちりあさまと他人子あて云つ
て見ると女達らみ淡倦とり攘夷とりの連中み一味
あさまとさかしのと自業自得とあきらめるより外仕
方々松人夫と残念と思ひ筋骨だーと夢の當坐と今
さう監えてつらると逆恨とであつと芝居でよる様
筋がきの入り組と関係の此方の畑ふやア根入り
ぐろりの風のゆるふ随つろ荷物と運ぶが肝心と火
事場ふ齊一の江湖上恩の義理のと騒ぎまわれ焼

死なとも言れ後鏡不成らぬ力瘤の出さずふおるのり
へまア徳用とらうト四十八本銀鎖からんと事の枕辺
ふ抛出して有る煙草入を煙管の先で引よせて煙草
の煙と輪ふふきり空うをぶいく居る顔と増え見
詰忙然とものと言ひ得ず居たりしが落る涙のさうト
掛一ニタ糸の前とみ掩ひ一膝を躡りよせ一閑取を
ちやア済ますまの立を苦の無い一往昔あ人弄へて
末の秋お前ふ連らる古々やなまれて此地へ来る途中

お前の御氣と踏出ー尋ねー人の空蟬のわくふ成たる
 財布の紐と松の下枝ふるげ掛とと思ひ出せを戦慄
 とまじ天神さぬの沖山とも知らずで二人が手み手と取
 り北野のちと消るるところと且那さぬ村岡さぬが夜参
 りふち出るささるとお戻り道お目お止つてお救ひ請けお
 前も吾儕も足の痛と函附よ業とお手厚いお世話で
 程よく丈夫お成るとお前の力量が有るううとてお
 出入りの都富士親方へ且那さぬよりのお声かりで元

ぐ好る角力とあり世間の人ふも
 名と知られ仲間のうちでも立ちまて抜群
 出世と誉そやされ人並勝れと
 暮し成るものも且那さぬの皆
 お蔭夫不との事と
 辨へぬお前さん
 での無い惚気嫉妬と
 言ろくが否さふ今まを悒



えて居おとが祇園ぎおんの藝子げいこ勇鶴ゆうかくふ心をひらきとれが迷まよ
ひ後あれが出でたのでは、度いいませう平常つねふの男おとこの事ことども
のヲ藝子げいこぐらゐも保養ほやうの一ひと世よふをくらき咎とがめい
せぬが大事だいじの敵かたみと、さき出でるがうり理りと非ひふまげそ
言いひ初まらう可あ惜う月つき日ひとべんくとお酒さけふをくり碎くだて
居おるのの閑取腰せきとこしが抜ぬけまうと、うと悔くやし涙なみだと吹ふてん
で口くちふ仕ませる雑言ざうげんと耳みみふも入いれまぜせり笑わらひつゝ女達おんなたち
らふ感かん心しんイヤゑらゐりのど勇鶴ゆうかくの身みの上うへの少すくし涙なみだが

あつと自己おれが引ひきうけ世せ話わとして遣やらぬ人ひと身の
振ふり方かたが六むくゝい女おんなどト言いて夫それふ掛かりあひは思おんふ
あつとこと我わ忘れての仕し舞まりぬ村岡むらおかさぬが蕪よもぎ生なり
でも為するといふ面白おもしろへ沢たけあゝ彼か様ようして棄すてちやア
置お初はめ人ひとけきとも返かへらぬ旅路たびぢへさざうらうとんまを乞こえ
の揉もむ人ひとが仕し初はめ人ひとくゝ夫それありぢうらう手てと付つけぬが
マア尚なほ世せらと思おもふのヨと亦またも枕まくらと引ひき寄よせて夜具やぐ
引ひき被おげを、お坊まふのあきれ、昔あま時ときことをも無なし

きつと思案の胸を定め何様でもおまさんがさう
しと氣なう五吾侑ア吾侑の覚悟が有るそんま
ふ眠らんごりうるところの済まう寝くおいでト
言ウ、立う帯より上げ身おしらんさんかろぐト
床ふかけう都石ヶ秘藏の刀とあう取りう佳
細き小脇ふ搔こそウ小褌と高くひき端しう
る表の方へいでんと為るあを遽しくも裳裾と煙
管の厂首ふう一寸捺へつ起かろう「何處へ往のど

「且那さぬのお後とおひうけ冥途へゆくのはな
います「そりや亦何振しう「ハイおまさんの魂魄し
為るおの刀を尋ね置と文吉の家へ今かろ
さぐ又出うりつて用有る振りう呼びりど一怨
その一ト太刀勝をより負れを直ふ黄泉ふ在す
村岡さぬのお側へ注きおまさんの腰がぬけとから
お前の代理ふおまさんの刀を働きまうととヤ一
上げお前のお倍禮と為るところと思ひきろろ

あさき きん うみづくこやこのしるん
挨拶を聞く合点都石何らの事と言ひ出るや开
の次回と讀て知りねじ

春雨文庫二編上之巻 終

010190509449

